

Title	<依頼論文>身体的主体を経験する--「身体による学び」の現象学のための理論的整理.
Author(s)	奥井, 遼
Citation	いのちの未来 = The Future of Life (2017), 2: 1-17
Issue Date	2017-02-18
URL	https://doi.org/10.14989/218235
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

身体的主体を経験する——「身体による学び」の現象学のための理論的整理

奥井 遼*

要旨

本稿は、近年の身体論的現象学の知見を参照しながら、「暗黙」であるとされている「身体的主体」の経験を把握することを目指すものである。身体が学ぶ「知」は、理解すること・実行することが一つにまとまった「行為的知識」であるとして、近年、教育学において注目が集まっている。例えばチェスやテニスのプレーヤーといったエキスパートは、抽象的な表象や、単純な反射に頼らずに、状況の差異を鋭く識別することで複雑な動作を達成する (Dreyfus 2002)。しかしながら、現象学者がこれまで明らかにしてきたように、そうした知は、反省的な把握を拒むものであり (Gallagher 2005)、疲れや病気など、通常の機能が損なわれたときのみ意識の対象となる。こうした消去法的な主体性の理解を乗り越えるために、本稿では、主体的な身体経験における物質性の役割に焦点を当てた、近年の現象学の成果を取り上げる。それによれば、例えばダンスなどの運動経験は、必ずしも当人に隠された経験ではない。むしろ当人は、身体において現れる様々な知覚において、身体の主体性を経験するという。こうした経験のあり方は、身体を対象として捉えていながら、それを「具象化」することなく (Legrand 2009) 知覚する点において、自己の主体の働きを積極的に捉える経験であるといえる。それは同時に、教えること、学ぶこと、変わることをめぐって、これらの経験の発生を、その意味の生まれ出る場所から眺めなおすことを可能にする視点を提供するだろう。

キーワード：身体的主体、学び、知覚、物質的経験、意識

はじめに

古典芸能の名人たちが残した芸談を紐解けば、頑固な師匠に対する敬意ある恨みのこもった逸話に出会うことがしばしばある。若かりし修業時代、稽古において、師匠から、一方的な態度によって自らの芸を否定されたというのである。

大正、昭和時代の名匠とうたわれた文楽の人形遣い吉田文五郎でも、駆け出しのときは手痛

* 日本学術振興会海外特別研究員 (パリ第五大学)

い仕打ちにあいながら鍛えられたと回答している。初めて「足遣い」に起用された頃、本番の舞台の最中に、師匠から高下駄で「脛のあたりを力まかせに蹴られることが毎日のように続いた」という（入江 1981, 141）。しかも、「人形の遣い方は、一さい手をとって教えられない」（ibid.）。師匠から弟子へのそれらしい指導がなく、ただ否定されるだけの日々。師匠と弟子が、もがきながら黙々とわざを極めようという場面が浮かんでくる。

他方、西洋の舞台芸術に目を転じてみれば、様子はがらりと変わる。ある身体芸術の教師によれば、生徒が身体を鍛え、演技を洗練させるためには、「対話」が欠かせないという。教師は、生徒のことを「よく眼差し、傾聴する」する（Wenner 2011, 24）。手取り足取り導き、生徒の好みを把握し、なんとか生徒の新しい動きを引き出そうともがく。例えばバレエの教師は、振り付けの稽古中、以下のように生徒に語りかける。「タクタクタク、一瞬止まって脚を下ろす、次にこう、タクタク、こうやって脚を下ろす。こうじゃないの。...アップ！考えすぎないで」¹。言葉がけのみならず、手本を示し、リズムをとるために擬音語を駆使し、全身を使って生徒の動きを引き出そうと試みる。

前者が、言葉を欠いた沈黙の稽古であるとするならば、後者は、言葉が過剰に溢れる稽古であるといえよう。身体を使った活動の幅広さに鑑みれば当然だと言えるのかもしれないが、それにしても、教え方・学び方のバラエティの豊かさには驚かされる。このバラエティの豊かさは、日本と西洋という文化的背景というよりは、むしろ「わざ」を新しく身につけるプロセスそのものの多様性を物語っている。

近年の教育学の議論において、「身体による学び」への関心は高い。これまで学習指導要領において、教育実践の中で伝達されるべき知識としてふさわしいものは、「言語記号化される情報」とされてきた（生田 2000）。『知識』とは、世界（状況）の中に人間の活動と分ちがたく『埋め込まれている』にもかかわらず、背景を含めた十全な知識の厚みに触れることは、今日の教育状況においてますます難しくなっている（ibid.）。

ところで、古典芸能や伝統工芸における「わざ」、あるいはスポーツ選手や音楽家などが経験的に習得している「身体知」、あるいは私たちの日常場面におけるスムーズな動作（歯を磨く、パソコンで文字を打つ等）は、理解すること・習得すること・実行することが一つにまとまった「行為的知識」である（金光 1993）。行動・習慣・信念にまで深く根ざしたまとまりを持っていることから、こうした知識の習得原理の解明は、情報化された知識の伝達とは根本的に異

¹ ドキュメンタリー映画『パリ・オペラ座のすべて』（ワイズマン、2009年）紀伊國屋書店より、6分54秒付近を引用。日本語字幕を参照の上、擬音語を書き加えた。なお、「tac」は、「カチカチ」といった意味合いの、「hop」は、「それっ」といった意味合いで用いられる擬音語である。

なるパラダイムを提案する糸口になる可能性も有している（松下 2005）。

ただし、しばしば指摘されるように、動作や感覚に関わる知は、マイケル・ポラニーが名指した通り「暗黙の (tacit)」知であって、その体験を言語によって伝えたり共有したりすることが困難である (Polanyi 1966)。動作に没頭している人は、ときとして自分がどうやって動いているのかを知らない。言葉で噛み砕いて説明することが、かえって動作を妨げることにもなりかねない点において、「行為的知識」に関わる一切の難しさを認めないわけにはいかない。

こうした知のあり方を、いかに教育の文脈で論じることができるのだろうか。課題は、上述の困難に向き合うことであり、そのために、安易な二元論に基づく「身体論的」考察を放棄しなければならない。

身を投じて教えたり学んだりする経験を語る上で、例えば「思考ではなく運動」、「言葉ではなく身体」、「命題知ではなく行為知」といった二元論に依拠することは、出発点としては有効である。しかしながら、それが誤った方向に転じれば、例えば盲目的に「身体で覚える」といった教育方法に結びつきかねない (西岡 2008)。あるいは、子どもたちの生き生きとした体験を引き出すような表現の授業、あるいは子どもたちの心を打つような道徳的な授業でも、それが「情操」や「感性」といった言葉で目標化され、「学習」というルールに乗せられた途端、本来持っていたはずの瑞々しさを失って、暴力的ないし消費的な教育言説に絡めとられることになるだろう (ibid.)。「暗黙」の知への関心は、命題的知識の解体を推し進めようとする健全な努力に支えられたとしても、努力それ自体がいつしか命題化され、現場を置き去りにしてしまうのである。安易な二元論に陥るのではなく、子どもたちの生きることを支えるような「知」のありようを見定める方角を目指すべきである。

そこで、「身体による学び」という現象への理解を深めるために、教育に関する議論をいったん脇に置いて、身体を動かすことそのものについての原理的考察に立ち戻ろう。行為的知識が「暗黙」であることは、それについての分析的考察を阻むものではない。近年の現象学的身体論の議論は、「主体／客体」「思考／運動」などの二元論的腑分けに安住することなく、運動や疾患に伴う生き生きとした体験に関する理論的枠組みを提供してきた。その探求の一端を覗き見ることによって、「運動を獲得するという経験」の豊かな多層性を明らかにしていこう。

以下、本稿では、メルロ＝ポンティの現象学を、運動獲得ないしエキスパートの経験分析の面から発展させたドレイファスの考察を取り上げ、その意義と問題点を明らかにする。その問題点を解決する糸口を、近年、認知科学・神経科学の知見を参照しながら現象学を発展させているギャラガーの身体論に求める。その上で、フランスで精神分析や現象学などの諸領域を涉猟しながら精力的に研究を進めているルグランの身体的主体性に関する考察を取り上げる。今日、もはや「ところが貧しい社会」という表現すら驚きを持って語られなくなった時代である。

本稿における理論的整理が、「言語情報化」された知識の学習を突破し、この困難な時代を、たくましく、こころ豊かに生き抜くことを支えるような教育思想の一助となることを目指している。

1. エキスパートの経験

現象学は、20世紀初頭の数学や心理学に刺激を受けつつフッサールがまとめあげた哲学の一領域である。物質としての肉体（Körper）と生きられた身体（Leib）とを識別することから始まったこの探求は、今日、客観的に測定可能な生理現象としてではない、かつ私たちが意識的に捉える対象としてでもない、世界の中で自ら意味を生成しながら生きる身体のありようを明らかにしている（Zahavi 2003）。

フッサールは、意識の外にあるはずの事物に意識がいかにして到達するのかという近代哲学の難問に対して、意識において事物が立ち現れるその仕方——意識による「構成」の問題——を論点として解決することを試みた（フッサール 1974; 1979）。つまり意識とは、常に何かに向かって「志向」するものであって、私たちにとってあるがままに与えられたこの経験の世界は、意識の志向作用のうえに成り立っている。意識の外にあるとされてきた事物の客観性妥当性について論じるのではなく、私たちにとって事物が事物として現われている、そのこと自体の仕組みについて考究する道筋を開いて見せた（Overgaard 2015）。

フッサールの現象学を発展させる形で、メルロ=ポンティもまた、人間における「生きられた世界」の記述を試みた。本稿にとって重要な点は、大著『知覚の現象学』における、運動習慣の獲得についての優れた考察である。彼は、運動を表象と自動運動とに分解する立場——哲学や神経科学において重要視されていた機械論的生理学および主知主義的心理学——に対して批判を加え、そのいずれにも分解できない身体の働き、「身体が身体たるためのさまざまな仕方」（Merleau-Ponty 1945, 144）を明らかにする。

たとえばオルガン奏者がコンサートをするとき、公演に先立って、椅子、鍵盤、ペダルなどを、自分の身体になじませようと努めるだろう。楽器の位置関係は、反省的な分析によって知ることになる「客観的空間」（*ibid.*, 170）にあるわけではない。思惟でもなく、かといって機械的な反射でもなく、その人の手や足が、最適な位置を選びとる。さらに、いったん音を奏で始めたら、彼の手や足は、楽譜で指示されている楽曲と、会場に鳴りわたる音楽の間の通過点になっていく。オルガン奏者の身体それ自身によって意味づけられる空間が立ち現れるのである。こうして、彼の身体は、新しい志向の糸を伸ばし、その先に、まとまった意味を生む。目指すところは、「表象された」対象ではなく、その人が「それに向かって己を投企する」対象である

(ibid., 161)。メルロ=ポンティは、そのような身体の働きを「根源的な志向性」(ibid., 160)、ないし「表出空間の根源」(ibid., 171)と呼ぶ。

メルロ=ポンティ以降、「表出空間の根源」としての身体の働きは、「主体としての身体」としてテーマ化し、身体を使って表現を試みるアーティストの経験を描き出すための有効な理論的枠組みとなっている (Kozel 2007)。例えば、『ダンスの現象学』などで知られるシーツ・ジョンストンは、近年「身体論的転回」を主張し、運動を基本的な原理とする哲学を構築することを試みている (Sheets-Johnstone 2009; 2011)。

本稿にとって重要な議論として、運動習慣の獲得を主題的に取り上げた現象学の理論がある。人工知能研究やメルロ=ポンティの英訳などで知られるドレイファスである。彼は大人が運動習慣を得る事象に着目し、習慣の獲得段階を想定し、新人がエキスパートに至るまでの段階を五つに分けた²。

新人が新しいスキルを身につけるときの、いかに簡単な動作であったとしても、思うように動けないところから出発する。そこで最初は、タスクに関わる動作を、文脈に縛られない (context-free) 特徴へと「分解 (decompose)」するところから始める。例えば、自動車教習所に通い始めた新人ドライバーは、指導員のアドバイスを受けて、アクセルをどの程度踏み込めばよいのかを、速度計やエンジンの回転数メーターを頼りに判断する。次第に慣れてくるにつれて、速度計を見なくても、エンジン音やアクセルの踏み具合だけで、適切な速度が分かるようになってくる。熟練になると、そうしたルールは一切が不要になる。車の速さを調整するために、もはや速度計にもアクセルの角度にも気を取られなくてもよい。「やるべきことは、やすやすとこなされる」(Dreyfus 2002, 372)。彼はただ、景色、周りの車、道路の混み具合といった状況に合わせて動く。新人からすると驚くほど複雑な操作 (速度を調整する、車間距離を気にする、信号を見る、ミラーを確認する、助手席の人と会話をするなど) について、いちどきに「即応すること (coping)」(ibid., 378) ができる。

ドレイファスが主張するのは、「反表象主義」である。すなわち、運動を習得するのに一切の表象を必要としないということである。彼において学習とは、理想とする動作や境地を心の中に浮かべるのではなく、与えられた状況の中で適切に応答ができるようになることを指す。学習者の経験は、「心の中で表象される (represented)」のではなく、むしろ、「ますます鋭敏に識別される状況として現れる (presented)」(ibid., 373)。

こうしたドレイファスの議論は、エキスパートにおける経験については鮮やかに解き明かしてくる一方で、新たな疑問を誘発する。学びの途上にある学習者について、あるいは熟練者

² 新人、初級、中級、上級、熟練であるそれぞれに対応する用語は以下の通りである。「Novice」、「Advanced beginner」、「Competence」、「Proficient」、「Expertise」。

がさらなる上達ないし工夫を試みるといった局面については、いささか歯切れが悪いからである (Sutton, McIlwain, Christensen, and Geeves, 2011)。

ドレイファス自身が認めるように、新しいスキルを身につける人は、熟練とは反対に、「身体的運動を意図」し、「私の意志によって運動が引き起こされているという経験」を持つ (ibid., 381)。こうした経験は、「のめり込んだ即応 (involved coping)」、すなわち現象学的に記述される熟練の境地とは矛盾する (ibid.)。「故意の (deliberate)」行為は「即応の (coping)」の行為と決定的に異なっており、私が意志することができるのは「即応」が阻害されたときのみである (ibid.)。こうして、行為について分析したり意志を持つという学習者の経験は、ドレイファス自身の現象学的な考察の範囲の外に置かれることになる。

学習の途上にある人の経験を議論の俎上に載せるには、一枚岩的な「反表象主義」では不十分である。「表象」の働きを無効にし、「状況」に豊かな意味合いを与えたのはドレイファスの重要な功績であるが、他方で、いかなる働きかけによって習慣が獲得されるかという点については十分な回答が得られない。というのも、ドレイファスは、動作にただ没頭すればスキルが身につくと指南するが、実際にそれほどうまくいかないことは経験的に了解されるであろう。

問題は、「即応」の経験の複層性にある。エキスパートは、自覚的・反省的に動作を把握しているわけではないために、「考えるよりも、動く」だけかのかもしれない。だが実際に動く人は、動くという経験にぼんやり没頭しているわけではない。少なくとも身体は、様々な働きかけ——音を聞いたり、何かを眺めたり、動く部位の感触を確かめる——を試みている。こうした経験の厚みの一端を明らかにするためには、「暗黙」でもなく「表象」でもなく、主題の照準を絞ることによって、当人の経験を選り分けるような議論が必要である。

2. 暗黙の知に迫る身体像／身体図式

運動の経験を複層的に省察するために、身体の働きについて包括的に取り上げた議論を参照する。出発点になるのは、認知科学と現象学の成果を取り入れ、人間経験の記述を企てるギャラガーによる「身体像／身体図式」の議論である。

ギャラガーは、身体的経験のダイナミクスを明らかにするために、「身体像 (body image)」と「身体図式 (body schema)」の区別を提案する (Gallagher 2005)。これらはいずれも、身体に関する心的活動を指しており、多くの心理学者・哲学者による多様な——やや錯綜した——解釈が提起されてきたが、ギャラガーは慎重かつ明確にそれらを区別する。身体像は、「自分自身の身体に伴う知覚、態度、信念の体系を構成する」 (ibid., 24)。それは、私たちの身体についてのイメージであって、思い浮かべたり感じたりする対象でもある。例えば、映画に出演が決ま

った俳優は、撮影の期間中、自分の髪型、体型、肌つやなどが大幅に変化しないように気をつけるであろう。ある程度の心がけによって、変化は未然に防げるし、少々の変化であればごまかすこともできる。ここで「身体像」とは、これら「見た目」に該当する。それは、目や耳で知覚する身体情報に限らず血圧や体重などの計測情報も含む。また、他人との交流、社会的流行や文化的バイアスにも影響を受けながら形成されるため、必ずしも本人が自覚しているとは限らない。いずれにしても、「身体像」は、人が自分自身の身体を捉える際の、志向の先にある対象の総体であると定義される。

それに対して「身体図式」は、姿勢や動作を司る「感覚—運動機能のシステム」であり、自己言及的な志向性の水準の下で作動する」(ibid., 24)。例えば先ほどの俳優が、控え室から撮影現場に出ようとするとき、彼の手は扉のノブを握るだろう。扉を開けるためには、ノブの形に合わせて手を開き、程よく力を入れ、ノブを捻りながら扉を引かなければならない。その人は、この一連の動作、また部屋の外に一步踏み出すときの姿勢について、いちいち意識を向けることをしない。その人の関心は、部屋の外に出ることであり、その後続く撮影の現場の方を向いている。扉を開くその瞬間、「志向的な水準の下」で働く、「前意識的、前人称なプロセス」(ibid., 26)こそ、「身体図式」の働きにほかならない。それは、「ほとんど自動的に」働く。

冒頭で問題になった、「身体による学び」に関わる「暗黙」は、この身体図式に関連している。ドレイファスが学習者の経験を議論の外に置いたのは、エキスパートの「即応」——すでに十分に機能している身体図式——を重視していたからである。動作が暗黙的に遂行されることのない学習者においては、意志的な動作という、いわば不純物を勘案せざるを得ないのである。

では、運動は「暗黙」でなければならないのだろうか。エキスパートは、動作を意志的に行うわけではないということは、少なくとも新人の努力と比べると、納得されうる。だがその動作は、当人が全く与り知らぬことを意味しているのだろうか。

ギャラガーは、身体図式の働きが暗黙でなければならないとは考えない。しかしながら、意識的・反省的な自覚によって捉えられるものではないとも考える。

そこで、ギャラガーは、「身体に意識的に注意すること (*consciously attending*) と、周縁的に気づいていること (*being marginally aware*) を識別することは重要である」(ibid., 27) とする。すなわち、身体を対象として捉えるか、対象ではなく行為遂行中の主体として、それを妨げないように把握するか、いずれかの態度が可能であると考え。だがいずれにしても、身体の働きの全体を意識によって捉えることはできない。

例えば身体図式は、「前知性的遂行 (*prenoetic performance*)」(ibid., 32) であって、意識の内容として現れるものではない。それは、具体的な行為の中にある。例えば熟練の大工は、鉋で木材を削りながら、刃の先でその感触を確かめることができるが、その感触は、身体図式の十

全な遂行——木の表面を薄く削り取るための微細な鉋使い、鉋の刃の先にまで拡張した触覚——によって成り立っている。その際、遂行中の身体図式の働きは、常に気づかれない。鉋を使うその瞬間、彼の指は鉋を適切に動かすために絶えず力と角度を変えているし、その膝は重心の移動に対応できるように柔らかく曲がるはずである。木を削るという行為に仕向けられた身体の動作に意識を向けることは、部分的には可能であっても、その全体に行き渡ることがない。少なくとも特別に自覚をしない限り、その人は、自分がやっているのは「木を削ること」、ないし「柱を仕上げている」と語るであろう。

したがって、身体の働きに気づくということは、何らかの意味で消去法的、すなわち失われるという仕方で誘発されることになる。疲れや病気といった現象は、この前知性的な現象の典型である。

例えば、ある人の眼は、本を快調に読んでいるときはその内容に向かう。ところが本を長い時間読んでいると「文章が難しくなり、照明がぼんやりし、姿勢が辛くなってくる」。そこで初めて「疲れ、ないし頭痛」として自覚されるのである (ibid., 34)。登山中の人についても同様である。山を長い間歩いていると、坂が急であるように見えてきて、一つ一つの岩が大きくなる。それまで脚を守ってくれていた靴は重たくなり、踏みしめるはずの石で脚を滑らせる (van den Berg 1987)。そうして自らを省みたときに、「疲れ」を知るのである。眼や脚は、動いている最中は私に気づかれないという点において、「匿名」である (ibid.)。疲れに気がついたときに、私は眼や脚に意識を向け、そこで前知性的匿名性が露呈される。病気になれば、普段の身体がいかに見事に機能していたかに気づくことになるだろう (van den Berg 1966)。

こうした消去法的な経験は、身体を、志向対象としてではなく、志向する者そのものとして経験することの難しさを物語っている。志向する者そのものは、志向することによって自らを成り立たせるのであって、その機能は志向の対象になることから逃れている。反対に、それが志向の対象になるのであれば、志向するという働きを失ってしまう。したがって、志向の働きは、それが失われた後でしか論じられないということになる。志向する身体の働きを、それが作動している最中で捉えることは可能なのであろうか。可能であれば、いかに記述することができるのであろうか。こうした問題を考えるために、以下、身体の主体について取り上げた議論を見ていこう。

3. 身体の主体性

身体を「対象」としてではない仕方で経験することは可能なのであろうか？「身体の主体性」をテーマとする哲学者ルグランは、こうした問いかけに回答を試みる。彼女は、現象学的身体

論を、メルロ=ポンティ、レヴィナス、ラカンなどの仕事を踏まえながら、臨床事例（身体疾患、摂食障害）、芸術活動（ダンス）、対人関係（カウンセリング、ケア）などに関連づけながら発展させている。以下では、ルグランらによるダンス経験の分析について取り上げよう（Legrand and Ravn 2009）。

ルグランによれば、現象学は、「生きられた身体」を「物質としての身体」から峻別し、前者の経験の豊かさを記述することに成功した（Legrand 2010）。そこで、意識にとっての対象でも、自動機械でもないような、自己であることが自明な（identification-free）「主体としての身体」が明らかになった（Legrand 2007）。しかしながらこの発見は、身体における「物質性」との深刻な断絶を生み、「身体」は主体において、比喻以上の働きを持たなくなるという帰結を導く（Barbaras 2008; Andrieu 2016）。

そこで、その物質性を排除しない仕方で、身体の主体的な経験を論じることを試みる。すなわち、ドレイファスが示すような熟練の「即応」でもなく、ギャラガーの「前知性的身体化」でもない仕方で、身体の主体性を捉えようという企てである。以下、彼女の議論に従って、「前知性的身体化（pre-reflective embodiment）」でもなく、「前反省的身体的意識（pre-reflective bodily consciousness）」でもない主体性の経験を明らかにしていこう。

3.1. 前知性的身体化・対象としての身体・前反省的身体的意識

ルグランは、ギャラガーらの現象学の議論の蓄積が、「生きられた身体」の経験をより詳細に論じることを可能にしたと考える。その上で、「身体的な主体性」の経験を明らかにするために、「前知性的身体化」、「対象としての身体」、「前反省的身体的意識」のいずれでもない現象を腑分けしようとする。

「前知性的身体化」とは、ギャラガーの論じる通り、私たちがそれを知るよりも以前に、身体によって形作られる意識や認知を指す。これらは、意識が捉える経験の中身——その「現象的（phenomenal）」側面——とは区別される。意識の構造ではなく、意識を構造化する身体の働きである。ルグランは、こうした身体の働きを認め、「身体それ自体が経験の対象（object）として与えられていない」点において評価する。しかしながら、こうした働きは、経験の現象的内容の中には含まれないために、反省的な意識が接近することはできない（Gallagher 2005, 2）。それは、「それは身体化の経験されざる（non-experiential）形式」であり、「経験から『隠されて』記述される」（Legrand and Ravn 2009, 390）。ギャラガーであれば、この経験されざる形式、つねに経験から隠れる働きを、まさに身体像と身体図式という二つの概念を交差させることで記述しようと試みるだろう。だがルグランは、身体における主体の経験に照準を定めるために、別の方法を探ろうとする。

二つ目に、「対象としての身体」である。身体に関する意識の中でも、容易に獲得できる形式である。すなわち、自分の身体を、本やコップと同じような事物として捉えようというのである。ここで身体は、志向的な対象 (object) となり、直ちにその色や形を得ることができる。ギャラガーであれば「身体像」へと接続されうるこうした側面は、一つの身体的経験ではあるが、やはり身体的主体の経験ではない。

そこで三つ目に、「前反省的身体的意識」が提起される。これは、例えば自分の手や足がどこにあるのかを、疑問視したり反省するよりも前に把握するような意識である。この意識は、自身の身体を、具象化しない (non-reifying) やり方で経験する (Gallagher 2005; Legrand 2007)。これは手や足がある位置を知らせる意識であるが、その意識は常に周辺的な位置にあって、主体としての身体の働きをおぼろげに知らせてくれる。

ここでルグランは、「具象化しない」経験のあり方に注目し、それが身体の物質性 (physicality) を捉える上でも有効かどうかを問いかける。すなわち、前反省的な、行為を遂行する身体のみならず、筋肉の塊として、知覚の対象として経験される身体に対しても、具象化せずに——したがって主体としての働きに関与するものとして——把握することの可能性を考察する。というのも、もし前反省的身体的意識が身体の主体性に関する意識の唯一の形式であるとするなら、主体が身体である——物質としてある——ことの意味が見えなくなるからである。それは再び主体-物質の二元論に立ち戻ることを指す。そこでルグランは、身体の物質性を残しつつ、主体であることにも寄与するような、かつ知覚的に経験する志向的な対象として捉える可能性を探る。

3.2. 主体性を知覚する

ここでルグランが提起するのは、「身体を知覚経験の対象として捉えつつ、主体性の経験を導くような」形式の経験である (Legrand and Ravn 2009, 391)。まず彼女は、主体が対象に還元されることがないことを確認する。例えば、右手で左手を触れる際、右手は触れる者、左手は触れられる者として知覚される。だが、右手を触れられる者として捉え直すならば、右手は直ちに触れることをやめる。ここで、触る手を、触れられる手と一緒にたにすることはできない。その意味で、主体は「触れる手」、対象は「触れられる手」であり、両者は決して合致しない。

しかしながらルグランは主張する。「前反省的に身体的な視点を経験することだけが、身体の主体性を経験する唯一の道ではない」 (ibid., 392)。手に触れる経験で考えれば、触れられている左手は、触れられるという仕方、その主体性を表現することができるのではないかと考えるのである。

例えば、友人の顔を見て、しわの寄った眉間に気がつくとする。ここで私が、「しわが寄って

いる」と考えるか、「うんざりしている」と捉えるかは大きな違いである (ibid., 393)。ルグランによれば、この差異は、注意の問題ではなく「具象化 (reification)」の問題である (ibid.)。すなわち、友人の顔に浮かぶしわをじろじろと眺めるとき、そのしわは、私にとって志向的な対象として「具象化」している。これは、人が「視線を固定」し、「分析的態度」を適応させるときに現れる態度である (Merleau-Ponty 1945, 262)。それに対して、うんざりした友人の顔を認めるときは、その友人が置かれている状況、体調、気分などが全体として私に訴えかけてくる。前者においては「主体性が疎外される」が、後者においては、「主体性は知覚される」(Legrand and Ravn 2009, 393)。この、じろじろ見ること (scrutinizing) と知覚すること (perceiving) の峻別が、主体性を経験することの手がかりとなる。

4. 動作の主体を生きる

ルグランらは、身体的経験が主体の経験になりうることの実証例として、ダンサーに対するインタビューを行う。ダンスを現象学の枠組みで論じる研究も踏まえつつ、より概念的・理論的な分析を試みている。以下、こうした分析を取り上げよう。

ここで登場するのは、三種類のダンサーである。鏡を使って自らの姿勢を理想に近づけようとするバレエダンサー、姿勢や運動方向などを感じ取って舞を生み出そうとするコンテンポラリーダンサー、および、身体内部の感覚に鋭敏になろうと試みる舞踏ダンサーたちである。彼女らは、自らの動きを作り出すとき、「視覚 (vision)」、「自己受容感覚 (proprioception)」、「内受容感覚 (interoception)」を導きとしている。これらが独立に働くことで、あるいは多様に組み合わせられることで運動が形成されると考えられる。

例えば、バレエダンサーは、その姿勢が幻想的な身体、すなわち「理想的で軽やかな身体的存在」であることを心がける (Legrand and Ravn 2009, 400)。鏡を絶えず見て、教師からの指導を受けることによって、身体の見た目を「内側から感じる」ようになるという。「彼女たちが皆強調するのは、ステップと動きのパターンは、見た目および『正しいと感じる』内的な感覚の、どちらにも導かれている」(ibid.)。そこで獲得される身体の使い方は、徹底して繰り返し練習することによって、「第二の自然」に近づいていく。ルグランが注目するように、この「第二の自然」は、当人の意志を超えたところで自動化するわけではなく、鏡を見ながら絶えず調整をする中で、ある筋感覚を「選択し、育てていく」(ibid., 403)。つまりそれは、けっして機械的・自動的な動作ではなく、かつ身体についての表象に導かれるのでもない、鏡像と感覚とが結びついた経験を伴っている。

コンテンポラリーダンサーの場合、即興的な振り付けが多いため、特定の動きを繰り返して

習得することはしない。彼らはむしろ、周囲の状況と、身体の内側に感覚を張り巡らせながら動きを練り上げていく。動きの手がかりになるのは、「筋感覚的な論理」(ibid.)である。四肢の重さや、骨格の可動範囲などを感じながら、動作が流れとなって出てくるのに合わせて舞う。音楽がある場合、それを耳で聞くのではなく、動きの全体が音楽の中に入っていき、ここでも、内側の感覚／外側の感覚という区別がなくなり、動きの中で知覚を新しく研ぎ澄ませていくという循環構造がある。

このように、ダンサーたちにおいて、知覚は、ダンスの動きを生み出す源泉として経験される。つまり、志向的な対象として捉えられるものでありながら、動きの主体として生きられてもいる。これこそ具象化されることのない把握の経験である (ibid., 405)。この主体の経験は、これまでの現象学者が論じてきた主体性の経験とは異なって、当人がそこに焦点を合わせることでできるものである。現象学者が主体の経験を論じる場合、焦点を当てられることのない、「周縁的 (marginal)」な経験であることが多い (ibid., 402)。しかしながらダンスの経験では、当人は動きながら、あるいは動きを準備しながら、自らの身体に注意を向けている。それでいて、ダンサーたちはその身体を具象化せず、新しく生まれつつある動きの源泉としている。ルグランによれば、もしこうした事実が的外れでなければ、経験を焦点化することは、必ずしもその人の主体性を疎外するわけではない、ということの意味する。むしろ、「主体性の経験は、知覚の文脈や、知覚している人の専門的経験に依存して、注意的 (主題的) でもあり退行的 (周縁的) でもありうるのである」(ibid.)。

以上がルグランらの「主体の経験」を明らかにする試みである。こうした記述に一層踏み込んで、ダンサーたちの経験そのものを実証することは本稿の力量を超える。しかしながら、ルグランらが描き出そうとした経験の側面——物質性を主体性として経験する——ことは、「暗黙」であるとされている行為的知識について、その一端を論じる手がかりになるだろう。

それは、運動そのものが意味を生み出すという点である。ルグランが明らかにしたダンサーの経験は、あらかじめ定められた振り付けを、機械的に覚えこむというプロセスではない。むしろ、舞を洗練させる過程において、その都度生じてくる新しい「知覚」——ルグランの言葉で言えば「具象化」されない志向性対象——に出会うことができる。その知覚に従って、当人は、新しい主体に出会うことになる。

こうした知覚の捉え方は極めてダイナミックであるが、メルロ=ポンティの芸術論とも一致する発想である。メルロ=ポンティは、セザンヌにおける表現に関する論考の中で、画家の知覚が世界の風景を新しく捉えるという現象を明らかにした。(Merleau-Ponty 1948)。すなわち、画家が絵の中に込める「質・光・色彩・奥行き」といったものは、知覚に先立って世界に存在している事物ではなく、「見る」という能動的な働きを通して初めて獲得される。画家がものを

捉える瞬間、知覚は「すでに様式化する働きを持つ」(Merleau-Ponty 1960, 61)。画家が絵を描くということは、知覚が発する要請に従って、あるいはその要請を新しく生み出すような、知覚と世界との出会いを描き出す努力にほかならない。

運動を通してその都度新しい知覚に出会うという見立てが正しければ、それは優れて教育学的な問題圏にも突入する。すなわち、身体は、運動習慣を身につけようとする瞬間、自ら新しい「知覚」へと自らを開いていく主体である。そこには、学ぶ者が世界を変容させると同時に、教える者と学ぶ者が互いに現前し、身をもって影響を与え合うという現場がある。当人たちは、教えること・学ぶことをめぐって、お仕着せの「教育目標」で語られない経験をしているに違いない。これらの経験の発生を、安易な命題化に惑わされることなく眼差すことができれば、そこに居合わせる人たちが、何かのやり取りをしながら次第に変わっていくという現象を、それが結果として教育と呼ばれる活動になっていくとしても、その意味の生まれ出る場所から眺めなおすことができるのではないだろうか。

おわりに

最後に、以上の現象学の議論が、「身体による学び」における探求に与える可能性を示唆しておこう。本稿で展開された要点は以下の通りである。

- ① エキスパートの現象学は、「反省」と「運動」とが分かちがたく融合している「即応」の状態を明らかにする。この観点は、学習が進むにつれて「状況をより鋭敏に識別することができる」という経験の変容を明らかにする一方で、学習者が反省的に運動を身につける経験についての分析を困難にする。
- ② 「生きられた身体」の探求は、「身体像」と「身体図式」とを峻別することで、その一端が明らかになる。すなわち生きられた身体は、普段経験されることのない前知性的な水準で動く。従って、身体的経験は、それが何らかの形で破られるときに明らかになる。
- ③ 生きられた身体の経験は、必ずしも消去法的にのみ現れるわけではない。ダンサーの場合、自らの身体感覚を利用することで、新しい動きを生み出すことができる。その際当人は、身体を、主体性と同時に物質性も経験することができる。
- ④ ダンサーにおける上記の経験は、その都度生じてくる新しい「知覚」に出会うことを意味する。その知覚は、新しい動作を生み出す中で、それ自身を変容させる。

こうした議論は、「身体による学び」が持つ複層的でダイナミックなプロセスを解明する手

がかりになるだろう。

私たちの身体は、運動を通して新しい知覚を得、その知覚を通してまた運動が変わるようなサイクルの中にある。知識が身につくということは、他者との関わりの中で新しい自己に出会い、世界の風景が違って見えてくることを意味する。こうしたサイクルを促し、それぞれの変容の諸相を細やかに眼差すことができれば、学びを貧しくするような力——言語情動的な知識の押し付け、行きすぎた個人主義・能力主義——を打破することができるだろう (van Manen 1990; 2014)。「身体による学び」の探求は、身体経験の現場と、現場を離れた思索の作業とを往還することによって、そうした変容を支える眼差しを豊かにする努力へと接続される (シュトラッサー 1978)。

身体の働きは、個人の身体的能力を開発することを目指す「個体能力論」的な学習観や、「頭で考える」ことに対して「身体で覚える」ことを強調する「身体論」的な学習観の陰で、それらを支えつづけている事象である (浜田 1993)。それを把握することは、言語情動的な知識観を乗り越え、教え手と学び手との双方が、学びを通じて変容し合うような共同作業を構想するという、教育学における大きな挑戦に向けた小さな端緒となるだろう。

引用文献一覧

Andrieu, B. 2016. *Sentir son corps vivant: Émersiologie I*. Paris: Vrin.

Barbaras, R. 2008. *Introduction à une phénoménologie de la vie*. Paris: Vrin. □

Dreyfus, H. L., Dreyfus, S. E., and Athanasiou, T. 1986. *Mind over Machine: the Power of Human Intuition and Expertise in the Era of the Computer*. Oxford, UK: B. Blackwell. (=ヒューバート・ドレイファス、スチュワート・ドレイファス、トム・アタナシウ [椋田直子訳] [1987]『純粹人工知能批判——コンピュータは思考を獲得できるか』、アスキー)。

Dreyfus, H. L. 2002. Intelligence without representation—Merleau-Ponty's critique of mental representation: The relevance of phenomenology to scientific explanation. *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 1: 367-383.

Gallagher, S. 2005. *How the Body Shapes the Mind*. New York: Oxford University Press.

浜田寿美男 (1993)『発達心理学再考のための序説』、ミネルヴァ書房。

エドモンド・フッサール [細谷恒夫・木田元訳] [1974]『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、みすず書房。

エドモンド・フッサール [渡辺二郎訳] [1979]『イデー I - I』、みすず書房。

- 生田久美子（1987）『「わざ」から知る』、東京大学出版会。
- 入江泰吉（1981）『入江泰吉写真集 第六巻 文楽回想』、集英社。
- 金光靖樹（1993）「M・ジョンソンの想像力論とその教育的意義——身体を基礎とした知識論の可能性」『教育哲学研究』68号、15-27頁。
- Kozel, S. 2007. *Closer*. Massachusetts: Massachusetts Institute of Technology.
- Legrand, D. 2007. Pre-Reflective Self-Consciousness: On being best in the world. *Janus Head* 9, no. 2: 493-519.
- Legrand, D., and Ravn, S. 2009. Perceiving subjectivity in bodily movement: The case of dancers. *Phenomenology and the Cognitive Sciences* 8, no. 3: 389-408.
- Legrand, D. 2010. Nous ne sommes pas des anges: subjectivité et objectivité corporelle. In *Merleau-Ponty, le corps en acte*, ed. B. Andrieu, 153-170. Nancy: Presse Universitaires de Nancy.
- 松下良平（2005）「表象の学習・生としての学び」『近代教育フォーラム』14号、49-62頁。
- Merleau-Ponty, M. 1945. *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard. (=モーリス・メルロ＝ポンティ [小木貞孝・竹内芳郎訳] [1967]『知覚の現象学1』みすず書房、[竹内芳郎ほか訳] [1974]『知覚の現象学2』、みすず書房)。
- Merleau-Ponty, M. 1948. *Sens et non-sens*. Paris: Éditions Nagel. (=モーリス・メルロ＝ポンティ [滝浦静雄ほか訳] [1983]『意味と無意味』、みすず書房)。
- Merleau-Ponty, M. 1960. *Signes*, Paris: Gallimard. (=モーリス・メルロ＝ポンティ [竹内芳郎ほか訳] [1969-1970]『シーニュ1-2』、みすず書房)。
- 西岡けいこ（2008）「脱自あるいは教育のオプティミスム——ソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義」『現代思想』36巻16号、347-357頁。
- Overgaard, S. 2015. How to do things with brackets: the epoché explained. *Continental Philosophy Review* 48, no. 2: 179-195.
- Polanyi, M. 1966. *The Tacit Dimension*. Garden City, NY: Doubleday. (=マイケル・ポラニー [佐藤敬三訳] [1980]『暗黙知の次元——言語から非言語へ』、紀伊國屋書店)。
- Sheets-Johnstone, M. 2009. *The Corporeal Turn: An Interdisciplinary Reader*. Exeter UK; charlottesville VA: Imprint Academic.
- Sheets-Johnstone, M. 2011. *The Primacy of Movement*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Pub.
- Sutton, J., McIlwain, D., Christensen, W., & Geeves, A. 2011. Applying intelligence to the reflexes: embodied skills and habits between Dreyfus and Descartes. *Journal of the British Society for Phenomenology* 42, no. 1: 78-103.
- シュトラッサー [徳永恂・加藤精司訳] [1978]『人間科学の理念——現象学と経験科学との対

- 話』、新曜社。
- van den Berg, J. H. 1987. The Human Body and the Significance of Human Movement. In *Phenomenological Psychology: the Dutch School*, ed. J. J. Kockelmans, 55–77. Dordrecht: Nijhoff.
- van den Berg, J. H. 1966. *The Psychology of the Sickbed*. Pittsburgh, Duquense University Press. (=ヴァン・デン・ベルク [早坂泰次郎・上野轟訳] [1975] 『病床の心理学』、現代社)。
- van Manen, M. 1990. *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*. Albany, N.Y.: State University of New York Press. (=マックス・ヴァン=マーネン [村井尚子訳] [2010] 『生きられた経験の探究——人間科学がひらく感受性豊かな「教育」の世界』、ゆみる出版)。
- van Manen, M. 2014. *Phenomenology of Practice: Meaning-Giving Methods in Phenomenological Research and Writing*. Walnut Creek, California: Left Coast Press.
- Wenner, É. 2011. Face-à-face pédagogique. In *Cirque à l'œuvre: centre national des arts du cirque*, ed. Centre national des arts du cirque, 24-25. Paris: Textuel.
- Wiseman Frederick, *La danse, le ballet de l'Opera de Paris*. Paris: Idélale Audience, New York: Zipporah Films. (=フレデリック・ワイズマン [古田由紀子訳] [2009] 『パリ・オペラ座のすべて』、紀伊國屋書店)。
- Zahavi, D. 2003. *Husserl's Phenomenology*. Stanford, California: Stanford University Press. (=ダン・ザハヴィ [工藤和男・中村拓也訳] [2003] 『フッサールの現象学』、晃洋書房)。

Experience of the Bodily Subjectivity: Toward a Phenomenology of “Corporeal Learning”

Abstract

This paper examines that recent phenomenological theories enable us to investigate the bodily experience, both subjectively and physically. Many phenomenologists have suggested that the bodily experience in the world is not produced by a particular mental state, nor by mechanical reaction, but is itself created through its own projections of meaningful relationships with the world. The skillful expert or athlete, for example, can realize a complicated gesture by the skills that distinguish a given situation. These accounts, however, also claim that one conceives of the experience of subjectivity as recessive or peripheral, because the bodily functions that underpin our actions are always executed under our reflections; they are done before we know it. Against this negative form of awareness, a few researchers dare to describe the bodily subjective experiences in themselves through examining the physical aspect of bodily subjectivity. In such a view, the professional dancer would be a good example of this phenomenon. Dancers prepare and create movements through “perceiving” the source of movement, which makes these movements accessible to the bodily subjectivity in a physical manner. This is further distinguished from the act of “scrutinizing,” which treats their bodies as a mere thing or objet d’art. This subjective and physical experience reveals the possibility of “non-reifying” experience, which may enable us to reconsider the rich corporeal experience available in learning beyond the normal view of hidden experience, and, further, to show us the dynamic function of perception that expresses our ways of being-in-the-world.

Keywords: bodily subjectivity, learning, perception, physical experience, conscious